

二十歳の誓い

小さい頃から人と異なる事をしたいと考えていた私は小学四年生の頃、周りが野球やサッカー一部に入部する中バスケットボール部に入部しました。中学でも続け、高校受験の際は推薦で入学しました。スポーツする身として順調でしたが一年目の夏、私にとって大きな壁に当たることになりました。

優勝の目標を掲げるチームの練習に精一杯な私でしたが、夏前に練習に応じた成果が得られないまま、ここまでやるのかと気が滅入り何に対しても無気力になりました。退部すると同時に退学することになる状況の中で私が救われたのは「大丈夫か」などの言葉よりも「お前面白いから続けたらええやん」といった同級生と先輩方の言葉でした。その後選手として復帰し無事に引退までプレーすることができました。

引退後は周りの人がくれた言葉や過去の学生生活などの経験から、大学の四年間は挑戦の時期にしようと思ひ、サークルや部活に入らず個人的な夢を追うという選択をしました。私の夢は「有名になる」ことです。これは小学生の頃から卒業文集で将来のことを熱く語るほど今でも本気で思い続けている夢です。その想いを胸に周りに宣伝までして始めた YouTube ですが数本の投稿で挫折しました。

このまま失敗に終えたくないと考えた私は今一番やりたかった音楽活動をしています。新たに行動を起こす際に背中を押してくれた友人のおかげで歌手になりたいという夢を明確に持つようになりました。そして去年の秋から河原町などで路上ライブを始めました。多くの人が見向きもせず通りすぎる中、立ち止まって聴いてくれる人がいるということが、とても励みになっております。曲を作る際にも心折れそうになることが多いのですが、それも私が決めた生き方です。あの頃もう少し挑戦しとけばよかったという思いのまま生きるより、必ず乗り越えて有言実行させる生き方をしたいです。

最後に私はこの場で「有名になる」ことを宣言します。これまでも同じことを口にし続けてきた私ですが、それは本気で夢を叶えたいと考えているからです。そして今この大勢の前で非常にリスクなことを言いました。でももうやるしかありません。今の目標は自分の誕生日である来月に自分の曲でデビューすることです。これから更なる挫折を繰り返すと思いますが全て行動の証だと認識して自分を奮い立たせていこうと考えています。失敗を失敗に終えず、夢ある未来に向けて挑戦し続けることを二十歳の誓いとさせていただきます。

令和5年1月9日 新成人代表 中村 凜

二十歳の誓い

私は小さい頃からシャイな性格で、人前に出たり自分の意見を言ったりすることが苦手でした。この内向的でおくびょうな自分の殻を破りたい、そして自分自身の考えを改めて確認し、この先の人生を見つめるために、「二十歳の誓い」に応募しました。

どんな人になりたいのか、ずっと心に思っていることがあります。「モモと時間泥棒」という小さい頃に読んだ本の中に、2人の人が喧嘩をしていて主人公の女の子のモモに話を聞いてもらいに来るのですが、モモに話を聞いてもらっているうちに不思議と怒りが消えいつのまにか仲直りしてしまうという場面があります。この場面が強く印象に残り、「モモのような人になりたい。そこにいるだけで周りを暖かくできる人になりたい。」と小学生の頃からずっと「モモのようないい人になりたい！」思ってきました。

そんな私の将来の夢は、難民の教育支援に携わることです。高校生のときに難民問題をテーマにしたワークショップに参加したことがきっかけで、興味を持つようになりました。「難民の約半数が子どもである」と知って衝撃を受け、当たり前で遊んだり学んだりする日々を送ることのできない子どもたちが世界中に沢山いるのだということを改めて実感し、心が揺さぶられました。自分と同じ歳くらい、または自分より小さい子どもたちが厳しい環境のもとで苦しんでいるのなら、彼らのために私ができることは何かと考えるようになりました。

今、大学で教育学を学んでいます。子供たちが戦争や紛争、日々の不安から距離を置いて安心できる環境を作りたいと思っています。日本の児童館のようなイメージの施設を、難民キャンプやその他の場所に住む難民の子供たちを対象に運営できたらいいなと考えています。安心できる場所で学ぶことによって、子供たちが保護に頼らず、自分で考え自分の人生を生きることが出来るようになる、私がこれから実現してみたい教育支援です。

二十歳になった私たち自身も、自分で考え、自分の意志を持つことは生きていく上でとても大切です。他人の望むことではなく、自分の意志をもち自分で決断すること、自分の人生を生きること、そしてそこに居るだけで周りの人を笑顔にできるような、そんな『いい人』になることを「二十歳の誓い」とさせて頂きます。

本日は、私たちのためにこのような盛大な記念式典を開催して頂きまして、ありがとうございます。心よりお礼申し上げます

令和5年1月9日 新成人代表 ブラウン 蒔七

二十歳の誓い

私の母は女手ひとつで、これまで一生懸命働き私を育ててくれました。何不自由なく、いつだって自分がしたいことはそちのけで、私がしたいことをさせてくれていました。

小学5年生の時にソフトテニスというスポーツに出会い、中学に入ってからもすぐに部活動を初め、日々部活動に打ち込んでいました。母は私に部活動だけでなく勉強も頑張ってもらいたいという願いがあり、中学生になったと同時に塾に通い始めました。

勉強が苦手な私に文武両道は難しく、塾に通うのが疎かになりはじめた中学2年生の夏のことです。ソフトテニスで高校に進学したい、そんな一心で部活動に励んでいましたが、勉強も部活も頑張ってもらいたいと願う母と意見の食い違いが出始めたのです。そして夏期講習が始まった頃、勝手に塾に電話を入れ休み始めるようになりました。そんなある日の朝、母に夏期講習に全く行っていないことがバレたのです。

「いい加減にしなさい。塾の授業料にどれほど大きなお金が動いているの。」と淡々とした口調で言葉をぶつけられました。部活動が忙しく母とろくに会話もせずでした。しかしこれを機に初めて母と向き合うことを決め、本当にしたいことは何か、気持ちをぶつけることにしたのです。思っていることを全てぶつけたことで、母は部活動を応援してくれ、ソフトテニスで高校に進学することが出来ました。部活動を通じて、人に支えられていることを強く実感し、人は一人では生きていけないのだと感じました。

そんなときテレビで災害の現場に駆け付け、人を助けている自衛官の姿を見た瞬間、「私も自衛官になりたい！人の役に立ち、人を支えたい！」と思うようになり、これが「第一の目標」となりました。

そして後半の人生には、「第二の目標」があります。それは母とキッチンカーをすることです。私の何気ない一言で「いいよ」と言ってくれた母と、二人で将来キッチンカーをすることは、大切な約束になりました。私が一番好きな食べ物は母の作るカレーです。このカレーをキッチンカーで売ることが私の将来の夢です。この夢をいつか必ず叶えたいと思っています。

まず社会への第一歩は自衛官となって、人を支え、その後は母と私の二人三脚で自分の好きな人生を生きていきたいと思っています。二つの夢を必ず叶えることを、「二十歳の誓い」とさせて頂きます。

令和5年1月9日 新成人代表 五島 聖愛

二十歳の誓い

私は高校生の時に、摂食障害とそれに伴ううつ病を患いました。きっかけはよくある普通の会話からで、「最近ホンマにやばいからそろそろ一緒にダイエットしよ！」と友達と約束し、軽い気持ちでダイエットを始めたからでした。初めは少し食事を減らしながら運動量を増やしていくという一般的なやり方でした。結果は、私だけが体重を減らすことができ、ここで私は初めて、ダイエットにおいて成功体験を味わうことが出来ました。

でもそこからは本当にしんどい毎日でした。一度成功したことにより「もっと体重を落とそう」と過度なダイエットに走ってしまったのです。もう食べ物のことしか考えられなくなってイライラし、大幅に食事を抜いていき、気づけば1日に500kcalしかとらないこともありました。当然、その後は反動で一度にたくさん食べてしまうこともありました。その度にもものすごい罪悪感に苛まれ、そのうち「死にたい」とも思うようになりました。痩せることに執着した結果、何度もむちゃ食いを繰り返し、その度に死にたくなり、何度も自殺を試みようとも思いました。ここまで来てやっと「このままでは本当に死んでしまう」ということに気づき、先生や親に打ち明け、初めて病院へと通うことができたのです。

うつ病になった私は、暫くは学校にも殆ど行っていません。しかし、卒業するには一定以上の出席が必要でした。もう何もかもしんどい中での体育の授業は、苦痛でしかありませんでした。でも、当時の体育の先生の授業だけは、楽しんで行くことが出来ました。一人一人に合ったペースで授業を展開し、しんどくて無気力な私でも楽しく授業を受けることができたのです。不思議なことに、体を動かすことで、自然と心も豊かになり、心も体も喜んでいるような感覚を味わいました。

ここまで私は自身の体験を特別かのように話してきましたが、これは私が特別なのではなく、本当にいつ誰に、どんなきっかけで起きてもおかしくありません。特に当時の私と歳の近い人達なら尚更です。そのような人たちに体を動かすことを通して楽しさを感じてもらったり、心の健康の分野で支えてあげられるような、そんな体育の先生に私はなりたいです。

自身が経験した苦しさ、その時にたくさん助けて貰った人達への感謝を、次に私と同じ経験をする人たちを救うことで返していくことを誓います。病気の頃を含め20年間支えてくれた家族やおじいちゃんおばあちゃん、友人や先生、多くの方々から感謝申し上げ、二十歳の誓いとさせていただきます。

本日は私たちのために、このような盛大な記念式典を開催して頂きましてありがとうございます。心より御礼申し上げます。

二十歳の誓い

私は父の仕事の関係から幼少期の多くを海外で過ごしました。現地の日本人学校は、生徒の入れ替わりが激しく、数カ月一度、新たな転入生の友達ができませんが、折角仲良くなった友達はすぐに転校してしまいます。「皆どうせ離れ離れになる」そう思うと辛くなり、友達と距離を置く癖がついていました。

小学5年生の時に日本に帰ってきました。京都の学校で受け入れてもらえるか不安であった私を、先生やクラスメイトは気にかけてくれて、温かく迎え入れてくださいました。

同じ頃、暴走族を取り締まっているパトカーを見て感動し、将来は警察官になりたいと思い、中学校からは剣道部に入りました。私は興味ある事は熱中出来るのですが、他を疎かにする傾向があり、周りからよく叱られていました。しかし、高校の時に出会った先生は、「そこも君のいい所だ」と初めて認めてくださったのです。その先生の勧めで参加したイギリスのサマースクールでは、海外在住の経験を活かし、積極的にコミュニケーションを取った結果、その意欲が主催者の方に認められ表彰されました。そのあとも様々な事に取り組み、自信をもった私は自己推薦入試を受けて第一志望の大学に合格することができたのです。

憧れの大学生活に期待を膨らませましたが、入学式の前日に交通事故に遭い、入学の日を一人病室で過ごすこととなりました。しばらくは遠隔で授業に参加しましたが、途中で勉強についていけなくなった私は、ほとんどの単位を落としてしていました。

夢を諦め意欲を失っていた私ですが、ある交番の警察官と出会い、時折交番に立ち寄っては他愛のない話をする関係になりました。事故の話や成績の相談にも乗ってもらううちに、徐々に前向き気持ちになっていったのです。「警察官になって事故や犯罪で悲しむ人を減らしたい、人の気持ちに寄り添える人になりたい」私の新しい目標が見えてきました。

また、交通事故に遭った時、動けない私を一般の方々が率先して救助してくださいました。私はその姿に心を動かされました。「いざ」という場面に遭遇した時、自分が少しでも力になりたいと考えた私は、京都市の消防団に入団し、積極的に訓練や講習に参加しています。

振り返れば、私はずっと恵まれた環境にいたのだと気づきます。これからは自分が社会を支える一員となって、次の世代に繋ぐ番です。この感謝の気持ちを忘れずに、目標に向かい、努力を続ける事を宣言し、「二十歳の誓い」とさせていただきます。

令和5年1月9日 新成人代表 松尾 颯太

二十歳の誓い

私は4人兄弟の母子家庭で育ちました。母はいつも仕事をしていたので、幼い時の記憶に母の姿は少ししかありません。かぎっ子だった私は、友達の家遊びに行くと「おかえり」と聞こえてくるのが羨ましくて仕方ありませんでした。10歳と11歳離れた妹と弟が生まれた時も、小さい兄弟の世話をするのは楽しかったのですが、正直母には、もっとこっちを見てほしいと思っていました。

中学校に上がると、私の反抗期が始まりました。一緒にご飯を食べるのも嫌で、母には勝てないと本心では分かってはいるものの、口なら勝てると思ひこんで必死に口答えをして、反抗していました。

中学1年生で生徒会に入り、人前に出る機会が多くなり、注目を浴びるようになった頃から、人に認めてもらえた時の喜びや、嬉しさに気づき始めました。中学の生徒会は私の居場所でした。そして、人前に出ることがとても好きになり、もっと色んなことをしたいと思い、高校に進学しました。

高校でも生徒会に入りましたが、中学とは全く違う生徒会の方針になかなかなじめず、すぐにやめてしまい、バイトにのめりこみました。バイト先では最年少だったので、年上の人たちに構ってもらえるのが嬉しくて、家に帰る時間はどんどん遅くなりました。毎日、学校とバイトの往復で、母と顔を合わす時間も朝の10分程度。顔を合わすのも嫌なくらいまだまだ反抗期でした。

そんな高校三年生の頃に、コロナがはやり始めたのです。学校にもバイトにも行けなくなり、仕方なく家にいると、家族と関わる機会が多くなりました。家族と顔を合わせて話をするようになると、意外と家族といるのは楽しいなと思えるようになりました。コロナのおかげで、家族の絆を少し深められた気がします。

私は、今、大学で社会福祉を学んでいます。その授業の中で、世の中にはいろんな家庭があり、しんどいのは自分だけではない事を知りました。そして、今3つの資格と免許を取るために毎日学校に通い、免許を取る関係で、通信制の大学にも通っています。通信制の大学は奨学金がでないため、バイトで稼ぐ日々です。親に頼らず生きるためにはお金が必要です。毎日学校とバイトの往復ですが、今を目一杯生きています。私は、これからも働く事と学ぶ事を、ずっと続けていきます。このことを「二十歳の誓い」とさせていただきます。

本日は、私たちのためにこのような盛大な記念式典を開催して頂きまして、ありがとうございます。心よりお礼申し上げます。

令和5年1月9日 新成人代表 高山 夢菜